

昭和十九年徴集 最後の初年兵

福建防衛戦

香川県 牛田 寿 一

大正十四（一九二五）年八月二日、農家の長男として生まれた私が、学校を卒業した当時は、国難、国難と呼ばれた後、大東亜戦争勃発という緊急のときでした。そして、緒戦の大勝の後でしたが、我々は英米仏という大国を相手に勝たねばならない、という緊迫した気持ちでした。

私は呉海軍工廠に雇用員として働くことになったのです。仕事は五メートル程の魚雷艇の組み立て作業でした。後に、その艇は「震洋」という、木製の艇の先に爆薬が付けられ、艇員はその後に伏せて艇を操縦し、敵艦に体当たりするという、水上特攻兵器でした。この組み立てや試運転をしていました。

この「震洋艇」が実戦に使われたのは、昭和十九

（一九四四）、二十年頃からであったと言われていました（比島・沖縄戦など）。しかし、私はその頃、後にお話する、陸軍兵として中国大陸の作戦に参加していたのです。

話を呉工廠の時に戻しますが、呉工廠で私が働いていたのは、呉の湾内にある「広町」でした。戦局がだんだん進むにつれて、呉工廠に外国の海戦で損傷した航空母艦、巡洋艦、戦艦などが入ってきました。港内には工廠に入れない大、中破の艦船が沖につないでいました。それら傷ついた艦艇を小破のものから修理をし、戦列に復帰させていたのです。

昭和十八年頃この状況を見てみると、無敵連合艦隊もだんだんと戦力が落ちているのではと、内心心配していました。しかし、大戦艦「大和」も海戦のため出航していったようでした。我々末端の雇用員は、集団で廠に入って生活をしながら仕事をしていました。軍隊の訓練は、呉の青年学校で一週間に一度教育を受けていて、一組、十〜十五人がおり、その上に組長という人がいて、一人前の職人になっていったのです。

私は当時、仕事をしながら日本海軍がこんなにやられているのでは、私も兵隊へ行ったなら生きては帰れないだろうと思っていました。

そのように思っている時に、大正十三年生まれの人たちと、大正十四年生まれの方が所謂、二十歳、十九歳の両年次の者が徴集適齢者となりました。結局、大正十四年生まれが、予定より一年早く徴兵検査を受ける、徴兵年齢が変わることになりました。いよいよ、我々も一年早く入営だ、と覚悟を決めておりました。呉工廠の職人として一人前になったのに、これも止むを得ない絶対命令でした。

昭和十八年十月末、香川県丸亀の歩兵連隊（中部第八二部隊）にいよいよ入営でした。当時としては、皆が兵隊に行かねばならないのだと、覚悟をしていたので、当然のことと私は思っていました。非常の時勢とは言え、親たちの気持ちは辛かったろうと、今日、人の親、祖父となってみれば、その心情は察しられ、当時の厳しい時代を思い出しています。

丸亀では十日間、その間、注射（四種混合）をしただけで、釜山―朝鮮半島―満州―北支那―中支浦口まで列車で、さらに揚子江を渡って南京―呉淞に着いたのは昭和十九年の正月になっていました。砲台の脇に集結しておりましたが、輸送係の班長以外は全部初年兵ばかりでした。一個分隊十四人で四個分隊、これが小隊であり、四個小隊で一個中隊で、第四中隊までありました。呉淞か上海まで歩き、三、四、五月の三月間初年兵教育の一期検閲を受け、やっと一人前の初年兵になったのです。

呉淞からは中国の船で南支、福建省の福州の第一線へ到着したのです。本格的な教育訓練は福州で受けました。内地から中支に出発する時に渡されたのは、三八式歩兵銃（明治三十八年式）という、四キログラム近い重さの終戦までの基本的兵器でしたが、これは一部の者だけで、他は帯剣のみ（鞘は竹製）という心細い装備でした。しかし、現地には九九式歩兵銃、九六式軽機関銃、八九式重擲弾筒などがあり、それぞれに渡されました。

いよいよ本格的教育が始まったのは、福建省長楽県金峰鎮でした。「着いたその翌日から、輸送機関、および呉淞の仮教育等のブランクを一挙に解決しなければならぬと猛訓練が始まったのである」と、幹候志願の同年兵は手記しておられる。

訓練の厳しさについて、同氏は思い出に細かく記されている。私の記憶では、現地で先ほど申した最新式の兵器が渡されたのですが、その前に初年兵は体の大きい順に呼ばれました。まず、大隊砲、重機関銃となり次に呼ばれた私は軽機関銃手（九六式）ということになり、次に擲弾筒、一般小銃手、という順であったと記憶します。

渡された兵器を見て、内地出発の時の、竹鞘のゴボウ剣（短剣）と比較し、やっとな戦闘ができると自信を持つことができました。出発の時のこんな装備で戦争ができるのだろうか、敵と遭ったらどうするのか、との不安は一掃されました。

教育隊の場所は、お寺の中で、床に藁を敷きその上にゴザのような物を敷いた。これが居間兼寝室でし

た。内地を出る時は、禪、襦袢、袴下等、皆新しいものでしたが、衣服はシラミだらけ。部屋は南京虫の巢、この駆除には苦勞しましたが、幸いにマラリアにはなりませんでした。

しかし、作戦に出てからは全員がマラリア熱を出し、一時作戦が中止になったこともありました。冬は蚊はいなかったのですが、五、六、七月となるとマラリア蚊が猛威をふるうこととなりました。熱が四二度くらいもでる。次に悪寒、ふるえが来る。ふとんの上から押さえつけてもらっても、ふるえが止まらぬ。その後、肝臓、脾臓がやられ、死ぬ者も出る。栄養失調者の脚気の者は、熱が出ると歩けなくなる。これでは十分な戦闘ができなくなるのは当然でした。

次に金峰鎮の教育について、私の記憶をたどり、また同年兵の手記などを借りて状況を話すことにします。

起床し、軍装準備が遅いと、寺院に続く高地へ「早駆けっ！」となる。早駆けとは駆け足とは違って、一

拳に緊急の動作で全力で駆けるというものである。平地ではない、木立もない山を駆け上るのであるから転落しそうになってしまう。また大演習地は治安が悪くいつ敵の攻撃があるか分からぬから下士官や助教達に掩護され、夕闇が迫るまで演習でした。

対戦車攻撃演習、福州はじめ東シナ海沿岸に展開した部隊は、米軍の大陸上陸に備えるための各部隊です。米軍がフィリピンの次に上陸するのは台湾か、中国大陸であろうと想定されていました。その備えが福建、広東省の海岸防備でした。従って上陸は戦車を先頭にしてくる。対戦車攻撃がまず重要でした。

そのために通称「あんばん」と言われる円形で真中に信管のある爆雷を、竹の先に付け戦車のキャタピラーの下へ投げ込む戦法を訓練した。これを繰り返して、タイミングと敏捷さの訓練に重点が置かれた。

実戦では多量の発煙筒が併用され、投げ込む兵を隠蔽されるのだが、まったくの肉弾攻撃でした。

また、破甲爆雷という磁力を持ち、これを戦車に吸着させるという、前の爆雷より危険度のある特攻訓練

もしました。また、突撃時も射撃できる体勢で突っ込む。兵の間隔を三步から六歩とする。この戦法の転換は、米軍装備の火力が強く、迫撃砲の進歩、自動小銃対策とし、日本軍が戦争末期に対策した戦法であり、これらの訓練は歩兵操典や射撃教範になかった教育、訓練でした。

我軍の損害を少なくするために、姿勢を低くし、隠密行動するための匍匐訓練が盛んになる。そのため高地へと早駆けでなく、銃を片手に、別の手で体を支えて、山を登るのだから、手や腕には生傷が絶えない。さらに酷なことは、ガスマスクを装着させることでした。呼吸も困難、まさに死ぬ苦しみでした。このようにして短期に訓練の成果を挙げることが、教育日程でした。

そのうちに連合軍は、レイテ作戦に勝ち、ルソン島にも上陸。いよいよ大陸へもという、緊迫した戦況の中での訓練であるため、教育者も受ける我々兵隊も真剣にならざるを得ませんでした。しかし、我々部下の

者にはそんな状況も分かっている訳ではないのだから、ただ訓練の厳しさに耐え続けていたし、体力的にも、氣力的にも落伍する者も多くなったことも事実でした。

我々が訓練で苦しんでいる間に、戦況はますます日本に不利となってきたようでした。米軍は台湾を攻撃せず、沖繩を攻略、本土九州上陸の公算が大となったため、我々の兵団は福州から北上し、上海方面への集合作戦が開始されました。福州地域の主力は、我々所屬の独立混成第六十二旅団（操兵団）でした。

兵団は陸路北上したのですが、これは温州からの第二次作戦でした。本隊は敵の攻撃を退けたり、敵が退避したりであまり犠牲はなかったのですが、部隊後尾であった第四中隊は、左右崖に挟まれた隘路で、あと一步で峠を越えんとした時、突如崖上から山砲や追撃砲を始め、チェッコ機銃の猛射を受けました。遮蔽する地物もなく、応戦するも崖上の木立や地形が障害となり、先進した我々の部隊が崖の背後に迂回して反撃、激戦二時間、ようやく苦戦より脱出しましたが、

戦死中川第四中隊長はじめ二十人、重軽傷者四十数人と思わぬ損害、犠牲者を出すという悲劇がありました。

私の隊は幸いにして戦死者もなく、戦病死や落伍者はでしたが、死者の指を切って持ち帰ったので、それは御遺骨として遺族の方に渡されたはずで。この集合作戦（支那派遣軍本隊への集合）は二十年五、六、七月でしたから台湾の彼方、沖繩での激戦、玉砕の時でした。もし、米軍が福建省に上陸すれば、我々は小兵力で、連合軍、蔣介石軍、共産新四軍、南支軍、閩軍と戦い、数多い犠牲を出したことでしょう。

終戦は我が集合作戦完結後、支那派遣軍が集結できなかった後で、部隊は上海の南方の嘉興に全員集結していました。そして、終戦となったので地域別に部隊が再編成されました。我が兵団は、四国、広島などの人が多かったようでした。

我々は、中国軍に武装解除されず、最後まで兵器・弾薬を全部持っていました。それは、蔣介石軍と中共

軍と争っていたため蒋介石軍は日本軍が引き揚げたら、兵器・弾薬・資料等は共産新四軍にとられてしまう可能性があると判断していたようでした。そのため、日本軍を頼りとし、武装解除しなかったといえます。

中国集中衛での食料等は蔣軍から支給され、あまり不自由はありませんでした。使役には、道路工事に一、二度出されましたが、その時は蔣軍がついていて被害を与えることを防いでいましたし、食料の支給も最後まで続けてくれました。

我々の居住はお寺であり、付近の住民のマラリア患者には、日本軍が薬を与えたりしていたので、日・中国の関係は軍・民共に良好でした。

我々は八月に集合し、帰還は昭和二十一年二月二十日、上海から米軍LSTで博多上陸、部隊はほとんどが同じ船への乗船でした。戦後、中国へ旅行し、現地人と再会した人もいます。

独立山砲第二大隊

湘桂作戦衛生隊

佐賀県 福島 春雄

大正十二（一九二三）年八月十日、佐賀県有田村黒牟田で生まれ、父は製陶業（登り窯）を営んでおり、私は高等小学校を卒業すると、戦時色も強くなり、おのずと勤務先は兵器関係が多く、陸軍造兵廠に勤務することになりました。仕事は、万能フライス盤という工作機械を操作していたのですが、徴兵適齢期となり昭和十八（一九四三）年六月検査の結果は甲種合格でした。上司の山本兵技大尉に申告し、造兵廠を退職したのです。普通考えますと、兵役という公務につくのですから、現役兵となるので退職しなければならなかったのです。

昭和十八年十二月十日、福岡の東公園に集合を命ぜられ、そこには、初年兵受領者が来ておりました。